



かわせ たかゆき
川瀬 隆千

KAWASE TAKAYUKI

職名	教授
専門分野	社会心理学 コミュニティ心理学
研究の概要	地域の環境問題（ゴミ問題）の分析と問題解決に向けた理論的・実践的研究。地域における子どもの居場所作り（子ども DAY 事業）に関する実践活動とその展開に関する理論的研究。ボランティア活動が大学生の自己理解や社会意識、就業意識に及ぼす影響に関する研究。小中学校での特別支援教育ボランティアの利用に関する実践活動とその効果に関する理論的研究。地域における子育て支援ネットワークの構築に向けた実践活動と理論研究など。
学会・社会活動等	九州心理学会理事 宮崎家庭裁判所参与員 宮崎家庭・少年友の会会員 NPO 法人 ドロップインセンター理事
主な著書・論文	<ul style="list-style-type: none"> ●感情の社会的共有（感情現象の諸相第4章）ナカニシヤ出版 2005年12月 ●影響力の武器—なぜ、人は動かされるのか（第2版）誠信書房 2007年9月 ●失業者の心理：感情の社会的共有が再就職過程に及ぼす影響 宮崎公立大学人文学部紀要 2003年3月 ●本学キャリア教育プログラムが学生の自己効力感に及ぼす効果 宮崎公立大学人文学部紀要 2006年3月
その他	なし
本人からのメッセージ	社会心理学、コミュニティ心理学の観点から、地域の問題解決について考えていきたいと思っています。



うめづ けんいちろう
梅津 顕一郎

UMEZU KENICHIRO

職名	准教授
専門分野	社会学 (情報社会論 コミュニケーション論 メディア論)
研究の概要	<p>情報化は、私たちのくらしを一変させました。SNSを媒介した人間関係や、現金のいない消費生活などの個人的なレベルから、「ネット世論の形成」という国境も越えうるレベルに至るまで、社会生活の変化は、もはや単に「便利になった」などというレベルをはるかに超えています。インターネットや携帯電話がもはや当たり前前の生活ツールとなり、さらには生活のいたるところに情報処理・伝達のためのメディア機器が遍在するようになったことで、情報と人間のかかわり、そして人間同士のかかわり自体が根本から変わってきているのです。</p> <p>では、これらの現象は何を意味しているのでしょうか。そして、情報化された先の社会には何が、そのなかでどう生きてゆけばよいのでしょうか。この問題について、社会学の観点から考えてゆきます。</p>
学会・社会活動等	<p>日本社会学会、日本スポーツ社会学会、日本社会情報学会 ひむかかたる協会事務局長 宮崎県後期高齢者医療広域連合情報公開審査会会長</p>
主な著書・論文	<p>1.著書 a.共著 ・『からだの社会学』池井望・菊幸一編、世界思想社 2008年 ・『変わりゆくコミュニケーション 薄れゆくコミュニティ～メディアと情報化の現在～』岩佐淳一・内田康人・前納弘武編、ミネルヴァ書房 2012年</p> <p>2.論文 a.単著 ・「プロレスと80年代」現代風俗研究会編『現代風俗研究会年報 32号・プロレス文化』40-59頁、2010年 ・「社会的自我」の拡散と過剰～若者コミュニケーション論にかいま見る「情報化」の行方～ 呉大学ネットワーク社会研究センター研究年報 Vol.4 2004年 ・「公共性問題のポストモダンの文脈～情報公共圏論の今日的可能性～」 呉大学社会情報学部紀要『社会情報学研究 Vol.10』2004年</p> <p>b.単著 ・「スポーツとことば～「古館伊知郎」とスポーツ実況～」(清水泰生、岡村正史、梅津顕一郎、松田恵示) 『スポーツ社会学研究』第14巻 2006年</p>
その他	
本人からのメッセージ	<p>「情報化」という言葉が当たり前の現実を示すものになって、既に20年以上が経過しました。しかし、現代を生きる私たちは、未だに「情報化」とうまく付き合い切れていないように思われます。私の研究では、この問題について「効率性」や「利便性」ではなく、「文化」と「意味」の問題から考えてゆきます。これからの宮崎地域を考えていくうえで、少しでもお役にたてれば幸いです。</p>



しかた ゆみ
四方 由美

SHIKATA YUMI

職名	准教授
専門分野	ジェンダーとメディア
研究の概要	マス・コミュニケーション研究の領域において、ジェンダー・パースペクティブを用いた研究を行っています。
学会・社会活動等	<p>学会活動：日本マス・コミュニケーション学会、日本社会学会、国際ジェンダー学会、ジェンダー法学会、など。</p> <p>社会活動等：宮崎県健やか妊娠推進専門部会委員（～現在）、宮崎日日新聞社「報道と読者」委員会委員（2004年～2005年）、宮崎市男女共同参画社会づくり推進委員会委員長（～現在）など。</p>
主な著書・論文	『ジェンダーからみる新聞のうら・おもて』（共著）現代書館、1996年、『観光万華鏡』（共著）鉦脈社、2001年、『女性白書』（共著）ぼるぷ出版、2001年『地域に根ざして 宮崎～九州～アジア』（共著）鉦脈社、2003年、「ジェンダーとメディア」研究におけるメッセージ分析『マス・コミュニケーション研究』No. 64、2004年、『婦人之友』にみるジェンダー 戦時下における身体管理をめぐる『メディア史研究』19号、2005年、『アメリカ・コミュニケーション研究の源流』（共著）春風社、2005年、「大学でのハラスメント対策の現状と課題」（『教育と医学』671号、2009年）、「男女共同参画社会の実現」（『未来への提言 10年後の宮崎を展望する』35～53頁、鉦脈社、2008年）、「はじめてみよう！布ナプキンライフ」監修（2012年3月）
その他	メディアにおける女性の地位国際調査日本委員会委員（2009年4月～現在）、(財)アジア女性交流・研究フォーラム客員研究員（2010年度）など。
本人からのメッセージ	市民（出前）講座として、メディア・リテラシー講座、セクシュアルハラスメント研修を行っています。また、地域女性史の研究、生理用布ナプキンを使ったリプロダクティブ・ヘルス/ライツの獲得（布ナプキンを使って自分の体と向き合う！）の活動にも取り組んでいます。

No photo

さかもと ひろし
阪本 博志
 SAKAMOTO HIROSHI

職名	准教授（文学博士）
専門分野	社会学・大衆文化論・出版文化論
研究の概要	1950年代を代表する大衆娯楽雑誌『平凡』の研究をまとめた拙著『『平凡』の時代——1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』を2008年5月に上梓しました。現在は、評論家・大宅壮一（1900-1970）を中心に研究しているほか、1950年代に影響力を持った他の雑誌の研究にも取り組んでいます。
学会・社会活動等	<p>【学会活動】 日本社会学会、日本マス・コミュニケーション学会、日本出版学会、日本教育社会学会、関西社会学会、社団法人現代風俗研究会、メディア史研究会会員。 2011年度より日本マス・コミュニケーション学会メディア史研究部会幹事。</p> <p>【社会活動】 2007年1月より宮崎県広報紙コンクール審査会委員。 2009年度から2011年度まで『宮崎日日新聞』「紙面診断」欄を担当。</p>
主な著書・論文	<p>【著書】 『『平凡』の時代——1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』（昭和堂、2008年5月）</p> <p>【論文】 「大宅壮一研究序説——戦間期と昭和30年代との連続性／非連続性——」（『文学』2008年3・4月号、岩波書店） 「占領期の大宅壮一——「大宅壮一」と「猿取哲」——」（『Intelligence』第11号、早稲田大学20世紀メディア研究所、2011年3月） 「1950年代『週刊朝日』と大宅壮一——連載「群像断裁」をめぐる——」（吉田則昭・岡田章子編『雑誌文化の戦後史』森話社、2012年刊行予定） ほか</p>
その他	上記著書により、2009年5月に第30回日本出版学会賞奨励賞を、同年12月に第18回橋本峰雄賞を受賞。 国際日本文化研究センターの共同研究（井上章一班）に2006年度から2010年度まで参加。
本人からのメッセージ	2006年春、宮崎公立大学への赴任とともに、宮崎の地にやって参りました。皆さま、よろしくお願いたします。



もりつ ちひろ
森津 千尋
 MORITSU CHIHIRO

職名	准教授（社会学博士）
専門分野	広告文化論
研究の概要	「メディアとスポーツ」をテーマに、韓国のテレビ広告の内容分析や国際的なスポーツ大会とスポンサーシップの関係について研究を行っています。
学会・社会活動等	日本マス・コミュニケーション学会 日本広報学会 日本スポーツ社会学会 関西社会学会 テレビ宮崎 CM 大賞審査員 宮崎県屋外広告物審議会委員 宮崎県乗合自動車広告専門員 宮崎市上下水道事業経営審議会委員
主な著書・論文	「メディアに描かれる「南国宮崎」『日本の地域社会とメディア（地域社会と情報環境研究班）』研究双書第 154 冊関西大学経済・政治研究所 2012 年 3 月。 「植民地下朝鮮におけるスポーツとメディア—『京城日報』の言説分析を中心に—」『日本スポーツ社会研究』第 19 巻第 1 号 2011 年 3 月。 「2002 年 W 杯におけるスポンサーシップとアンブッシュマーケティング——韓国における「街頭応援」現象について」『広報研究』第 10 号 2006 年 3 月 他
その他	
本人からのメッセージ	宮崎という土地で、いろいろな事を学びながら、研究を通して地域に貢献できればと思います。